

私が高等小学校二年のときであった。理科担任の河野校長先生が二包みの薬品をもってきて私を呼び出し、「これを静かに混ぜなさい」といわれた。私も工場で父親たちが雷薬を混合しているのを見ていたので、そのようにそつと白い薬品と暗赤色の粉末を混合して、先生に「このくらいの混りかたでいいですか」と差し出すと先生はそれを茶色の封筒に入れ、教壇の上に小さい板をおいて、その上にその封筒をのせた。先生は用意していた金槌を振り上げて封筒の包みを打った。ドーンと耳をつんざく爆音がして、爆煙が天井までもうもうとあがり、生徒一同度肝を抜かれたのだが、その煙のなかから先生はニコニコしながら顔を現わしたのであった。そして「さつき細谷の混ぜたのは塩素酸カリウムと赤リンである」といわれ、マツチの軸木と箱の摩擦薬のおもな原料であることを、わかりやすく話されたのであった。

小学校を卒業して四、五年後、東京の浅草蔵前の山縣源七商店の主人から通称「投げ花」といわれる五色のテープをみせられ、「テープをこのように投げると伸びていくがこれを花火でできないか」といわれた。そのとき思い出したのは、あの赤リンと塩素酸カリウムであった。乾燥した薬品そのままでは取り扱いも危険で自然発火の心配もあるので、塩素酸カリウムをアラビアゴム溶液で練り、それに三硫化アンチモンを入れるとこれだけで爆薬になるが、発火しやすくするために赤リンを五パーセントくらい加え、木綿糸の折り曲げたところに、耳かきくらいの竹べらで○・○三グラムくらいを附着させ、長方形に切断した更紙を巻き付けて、これを五色テープの発射薬とした。図一のように筒の中央から下部に段をつくり、厚い円形のボール紙に発射薬の木綿ヒモを通し、下方で糸をひけば発射薬が爆発する。筒の上部に薄紙の五色テープをおく棚を設け、テープの上を紙で蓋をし、外側はクレップ・ペーパーで外観よく仕上げてサンプルをつくった。山縣源七商店へもっていき試験をしたとこ

ろうまくいき、山縣さんは狂気して喜び、何万ダースでもできるだけ売るからつくってくれ、といわれた。そこで内職の人三百軒を頼むなど大車輪をかけてつくった結果品物は飛ぶように売れたのであった。これがクリスマス・クラッカーである。

私どもの細谷火工の基礎をつくったヒット商品だが、それも現在は故人になられた五色テープをみせてくれた山縣さんと糸鉄砲のヒントを与えてくださった河野校長先生のおかげと心から感謝をしている。

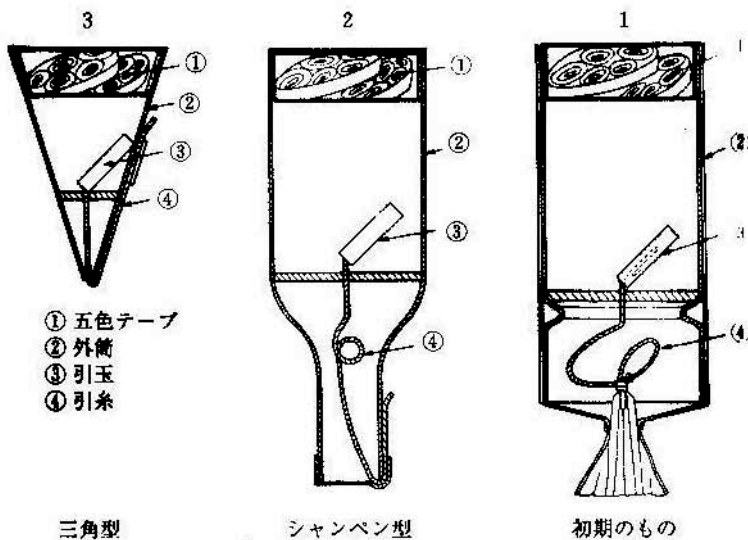


図1 クリスマス・クラッカー断面図

危機救ってくれたパラシュート

昭和六年六月十日未明、父（政夫の義父）の経営する煙火火薬庫が自然発火で大爆発を起こし、それまでつくりためていた打揚げ花火の製品を全部焼失してしまった。その結果、夏の花火のシーズンを迎えても売る花火も無い。そこですぐ金になるものは何か、と考えふと気がついたのが、目の前にあった割物の残光用に使う直径十センチほどのパラシュートである。これを筒に入れて打ち出す玩具花火をつくったら売れるかもしれないと考え、さっそく試作したのであった。まず雁皮紙そのままのパラシュートでは子供が喜ばないだろうと思い、色をつけ、直径一インチの筒に粘土底を設けて火薬一グラムを入れ、綿の実を充填してその上にパラシュートをたたみ込んで入れ、筒の外から火薬を点火するようにした。きわめて簡単なものだったが、試験したところ三、四メートルも高く上がるものもあった。問屋にみせたら買ってくれるだろうかと心配しながら東京蔵前の山縣商店に見本をさつそくもっていった。山縣さんはこれを見て「たいへん面白い、一万本製造してくれ」ということで、驚いたことに手金として百円を渡してくれたのであった。そこで父に玩具花火をやりたいとそれまでの経過を話したが、父は玩具花火をやることに賛成してくれなかった。「やるならお前やれ。オレは玩具花火などいっさい関係しない」ということで全部私がやることになった。

不景気な時代だったので人手はいくらでも集まり、またパラシュートの糸付けや筒巻きは内職を利用し、一万本の注文は一月足らずでおさめることができた。そして非常に売れゆきがよく、追加注文として五万本を頼まれたのだった。当時五オンスのボール紙一トンを四十五円で仕入れることができ、パラシュートの紙も六枚取りで一枚二銭くらいのときであったので、一本三銭のパラシュート花火も相当な利益がある勘定であった。ところが当時の父の考え方は、「打揚げ花火は大名の道楽だ。駄菓子屋に売ってもらおうような玩具花火をつくるのは乞

食商売だ」であった。武士は食わねど高楊子を気取ってか玩具花火のことには関心はなかったのである。

翌年は打出し筒の中に入る内筒をつくり、その中にパラシュートを入れ、導火線を着けて発射すると二、三十メートル昇ってからパラシュートが放出されるようになった。またパラシュート花火の底部の粘土をコルク栓にかえ、クリスマス・クラッカーに使うような糸引雷管の糸をコルク栓を通じて下に出しておき糸をひくとその雷管が発射薬の中で発火し、発射とともに爆発してパラシュートが入っている中管が発射されるようにした。引玉（糸引雷管）の爆発がクリスマス・クラッカーと同じでは発射薬に点火しないので、爆薬の配合率をかえてやってみるなどいろいろ試した結果、爆薬の配合中に、硫化アンチモンの比率の多いのが発射に火つきが一番よいことがわかった。さらに筒を片手でしっかり握りもう一方の手で引糸をひくため万一にも筒が弱くて破れるようなことがないように外筒の強度も強くした。これをナンバ7と名づけたが、輸出用にもだいたい注文があった。さらに工夫をこらしたものがパラシュートのおもりにしていたセメントを色星にしたもので、空に放出されると色星に点火してパラシュートに吊るされて十秒くらい燃える花火であった。

去る昭和五十三年、私は日中玩具煙火友好視察団の一員として中国煙火製造所を見学する機会を得た。そして湖南省の花火工場をみて驚いたことに、何百人もの従業員がほとんどパラシュート花火をつくっていたのである。なかには私の工場でつくったものと同じのももあったし、三個のパラシュートが飛び出すものもあった。いま、日本国内に巡回しているパラシュート花火のほとんどは中国産だが、これでは低賃金の中国にかなうはずがないと感じたものだった。

煙を出すゴルフボール

私の工場の地続きに、立川国際カントリークラブがある。昭和三十年頃のオーブンで、当時は大部分が町有林の借地だったが、一部私どもの土地も含まれていた。土地を提供しメンバーにもなった。ときどきゴルフ場に出かけていきクラブを振ったが、あまり上達しなかった。ある秋晴れの日にゴルフファーがボールを打つのをぼんやり眺めていたとき、紺碧の空にボールが飛んでいくのを見てパツと頭にひらめくものがあった。それは飛んでいくボールが煙跡を残したらどうだろうかということであつた。さらにその煙にいろいろの色をつけたらゴルフファーは喜ぶのではなからうかと考え、さっそく試作してみた。最初はプラスチックでゴルフボール状の玉皮をつくり、中に煙薬と発火薬を入れて打ってみた。発火は瞬間に割れてしまつたりした。一方、発火薬は取り扱い中に容易に発火するようでは、危険で使いものにならない。そこでこの発火薬として平素の取り扱いでは発火の心配がなく、しかも強烈な衝撃によつて初めて発火するものを選び、それを小粒に砕いた砂利に塗布した。そうしたものは発火の時に爆発圧が出てボールが破れるのを防ぐためである。また発煙剤も早く燃え過ぎず、またいつまでも火が残るものをさけた。それはゴルフ場の枯草などに引火する心配があるからであつた。ボールの皮もゴム製にして片側に四個の発煙孔をつけたのであつた。これが現在発売されている発煙ゴルフボールである。

製品は千ダースを一口ツトとして検査している。製品一口ツト中から四十個を抜き取り打つてみて異状の有無を検査し、さらに高さ二メートルから落下させて発火の試験をする。万一発火したものがあれば、その不良品が出たロットは不合格として出荷しない。この発煙ゴルフボールも会社の業績に貢献するようになったので、ゴルフ場の上空を仰いで感謝している。

興業花火の失敗

煙火業者が興業的に手を出すのは大変難しいということを知らされた経験が二度ある。一度は昭和二十四年頃後樂園球場で開いたバレーと組み合わせた興業花火である。バレーのほうは小牧バレー団を頼み、入場料は大人百円、子供五十円。都電、都バスにも車内広告を掲載するなど宣伝を十分したので、満員にならないまでも一万人は入るだろうと胸算用をしていたのだが、フタをあけたら入ったのはわずか二百人くらいであった。人氣がなかったわけではない。その証拠に“場外”は満員だったのである。花火は高く揚がるものもあるから球場の外からでも十分楽しめる。バレーはともかく、花火だけはタダで見物できるのだから、入場しないチャッカリ組が多かったというわけで、そこに全然気がつかなかったのはうかつだった。結局バレー団と後樂園の費用その他で合計三十万円を当社が負担する始末になった。花火代のほうも含めれば大赤字であった。

後樂園での失敗から数年たって、今度は読売新聞と大森海岸の平和島温泉で競艇場を使って花火興業をやることになった。読売新聞なら催しにも慣れているし、花火の合間に島倉千代子が歌を唄うということも呼物にしているので、成功するだろうと思いつながら準備を進めたのであった。競艇場には高さ七メートル、幅七十メートル位の仕掛花火の足場が地元の鳶職によつて建てられていた。そして仕掛花火をトラック五、六台で運び、それを水面に建てられて足場に取り付ける作業を、こちらの従業員十人ほどで進めていった。遅い夏の日がそろそろ暮れようとしていたとき、強い南風で足場の南端が仕掛花火もろとも倒れ始めたのである。全部連結している足場だからたまらない。半分以上は水中に浸ってしまった。これを直していたらとても間に合わない。そこで主催者が集まって相談し、急拠中止することにした。入場者はかなり増え出し、島倉さんにはもう歌ってもらっていたが仕方がない。入場料を払い戻しする木戸に入場者

が殺到するなどの大騒ぎとなったが、読売新聞と共催の形だったので仕掛花火は全部駄目にしたほか、足場建設費はこちらもちとし、他はいつさい新聞社側で負担ということ、被害はたいしたことなかったように記憶しているが、それにしても大失敗であった。砂上の楼閣ならぬ水中の足場について倒れないように支線などもっと嚴重にすべきであったことを反省している。

異国の空に揚げる

一九五六年一月（昭和三十一年）、ベネズエラで行なわれたカリブ海沿岸諸国の“オリンピック”のアトラクションに、私は花火打揚げを頼まれて出かけた。会場はカラカス市の大きなグラウンドで、聖火台の火が消えると同時に花火を打揚げてファイナレを盛り上げようという趣向であった。

用意していった花火は八寸（八号）以下二百発とスタイン二百発、それに仕掛花火のナイヤガラ瀑布百メートルで、日本の花火大会でいえば中規模クラス。スタインとナイヤガラの設置は現地の国防軍の砲兵たちが手伝ってくれたが、打揚げ者は私一人、おまけに打揚げ時間は三十分間で、それより早すぎても遅すぎてもいけないということであったので、てんやわんやであった。

七、八寸玉は単発で、四、六寸は早打ちであった。七寸玉と八寸玉各十発をそれぞれ二本の筒で打揚げ、六寸以下の打揚げは一回に十発を一本筒で打揚げ、同じ筒は二回使用しないことにしていたので筒の数は多かった。一回分の早打ちの玉は筒の近くにおき、私が手を上げると焼金を兵隊さんが運んできて筒の中に入れてくれるので玉の運搬は必要なく助かった。ナイヤガラ瀑布のほうは点火する時間をきめて兵隊さんに頼み、他の打揚げ玉の容器には時間を大きく書いておき、時間専門の係にお願いした日本大使館の人にみてもらったので一分の差もなく無事終了したのであった。

それから八年後、今度はフランスのパリに花火を打揚げにいった。日仏文化交流の一環として読売新聞が企画したもので、今回は青梅市の志村さんという電気屋さんといっしょで、彼が点火を受けもってくれたのでたいへん助かった。花火の規模としてはベネズエラるときより大きかった。打揚げ現場はルイ王朝華やかかなりし頃にできたという「ソウ」公園で、広大な敷地内にある豪華な庭園の中央の瀑布と池の付近であった。打揚げには現地

の花火業者三人が手伝ってくれたので非常に助かった。その現地の花火師たちと、花火の実施される前後一週間ほど、いっしょにドライブしたりしていろいろと話をきいたのだが、花火の技術や知識は日本の明治の末期程度ではないかと感じた。彼らは「もう再びフランスに花火をもってきてくれるな」というので、私は「私だけは約束できるが、皆さんがもう少し勉強しないと私以外の日本人が商売にくるかもしれない」と答えた。そのうちの一人が、自分の一人息子を仕込んでもらいたいと熱心にいつていたのはいまだに忘れられない。私どもが打揚げた翌日彼らのパリー祭の花火を見たが、比較にならないほど貧弱なものであった。

花火大会は“花火仕掛人”にとつては晴れの舞台である。といつても主役は花火であり、花火仕掛人はあくまでも舞台には出ない演出者であり、裏方である。その演出ぶりや舞台裏での仕事ぶりで花火の出来、不出来がきまるといつてよく、苦勞は多いが、観衆が花火に酔つてくださればくださるほど、その苦勞も忘れるというものである。

花火大会は時間にすればせいぜい一、二時間だが、そこにこぎつけるまで結構手間がかかる。まず主催者側との打ち合わせが三か月前くらいから始まり、契約書が取り交わされたところで打揚げ許可申請の手続きを都道府県知事に行ない、大会の準備にかかる。

まずプログラム作成。ただ花火をやみくもに打揚げるだけではせっかくの花火の饗宴も音と光が交錯するだけで印象の浅いものになってしまうので、盛り上がるのタイミングをはかるプログラムミングが大切なのである。このプログラムづくりの基本として、同一種類の玉やスターマインを連続して揚げないようにしている。これは花火が画的になることをさけ、観客が次の花火を期待する気持ちより高める効果をねらつたものである。ポカ玉を揚げたら次は小玉や中玉を揚げ、ややだれ気味のときには思わぬ方向から華麗なスターマインを打揚げて人びとの度肝を抜き、あるいは赤、青、黄、銀、白などの色も効果的に取り合わせるよう努めている。

また、煙火玉が打揚げられてただシウルシウルと昇つていくだけでは興味が少ないので、上昇中に白光の尾を引いたり、鋭い金属音を響かせたり、あるいはいくつもの小玉がパツパツと花を開かせたり、いわゆる「曲」をつけた花火を折り混ぜることもしており、ふつう全体の四〇〜五〇パーセントがこの曲付きである。そして八ライトは、ナイヤガラを中心とする仕掛花火。この間は打揚げ花火は中断して観衆の目をそこに集中させる。そして仕掛花火が終わりに近づくと、裏打ちと称してス

ターマインを打揚げて、仕掛花火の消滅間ぎわの淋しさをカバーするのである。

いよいよ終幕に近づくと、大玉を威勢よくポンポンと揚げ、大空に大輪の花を盛んに咲かせる。そしてその映像が消えやらぬ間に、数百発のスターマインをいつせいに打揚げて花火大会の興奮をいつきに盛り上げる。フィナーレは三段雷、五段雷、あるいは万雷の連発、これで観客に終了を知らせるわけである。

プログラムが出来上がると、次は細かいタイムスケジュールづくりと打揚げ玉や仕掛花火の用意である。玉は打揚げ現場で筒に入れる方法と、工場であらかじめ筒に仕込んでおく方法とがあるが、一万発近い玉を揚げるような大きな大会では、筒にあらかじめ入れておく方法でないとい時間的に間に合わない。

そして大会当日。大型トラック二台に筒に入れた打揚げ玉や仕掛花火類を、もう二台に小道具類や防火用具と氷の山を積み込む。氷とは場違いな感じをもたれる向きもあるが、これは飲み水用である。打揚げ場所はだいたい人家や各施設から遠く離れているのが普通だし、大会は夏が多く、汗まみれになつて緊張した仕事が続くので、何よりもこの冷たい水がありがたいのである。

トラック四台、打揚げ従事者を乗せたマイクロボスの“花火車両”行列が現場に着くとただちに作業開始。打揚げ筒の設置では延焼防止のために落葉を払い枯れ草を刈り、筒の周囲に水を打つて湿らせ、そこが山林の場合にはとくにお願ひして消防署に付近に散水してもらつたりする。仕掛け花火の枠組みなどもあつて、大会現場はそれこそネコの手も借りたい忙しさである。準備が整つたところで監督官庁の担当者や消防署員の検査が始まる。許可申請書の届け出内容と違つていないかどうかの検査で、微細ななかなきびしいものである。

いよいよ打揚げ開始間近。各持ち場に散つた担当者から携帯無線機や仮設電話などで「準備よし」の報告が監

督者に寄せられる。黒玉の警戒要員も要所、要所に配置されている。大会開催の合図は五段雷、三段雷などの信号雷である。この合図を待ちかねたように「ドッーン」「シユルシユル」と絶え間なく揚がる花火。大空に精魂傾けた火の花が開いていくが、觀賞している暇はない。ただ玉の行方を見つめて点火したか点火しないで黒玉になつたかどうかを確認するのが精一杯である。とくに危険な仕事はスターマインの打揚げで、同じ場所から同時に数十発、数百発の玉が揚がっていくので、打揚げ者は全身に火の粉を浴びる。その火の粉が次のスターマインのセットにかぶせたシートの上にも降り注ぐので、竹ぼうきで払いのけたり、地面で燃える残さいを消火したりしなければならぬ。

花火大会が終わると、だれもかれも顔はすすで薄汚れてその仕事ぶりをしのばせる。だがホツとする暇もなく次は撤収作業。準備のときの三分の一の時間ですむが、それでも帰社できるのは午前零時をとくに過ぎた時刻である。そして翌朝再び現場に戻って、昨晚の暗がりですりすまされなかつた現場付近の整理と黒玉の搜索をする。黒玉が一つでも残っていると危険なので、山林などの中でも徹底的に行なうことになっている。

わずか一、二時間の饗宴のために、費やされる費用と労力は莫大なものである。それでも人びとは花火を求め、花火師は花火づくりを止めない。とくに一年三百六十五日を花火づくり、花火大会のために過ごす花火師にとつてその一日一日が生き甲斐につながっているからである。

「事実は小説より奇なり」と言うが、私たち親子は「裁判は小説より面白し」を経験した。最初の頃は、人にどのように話してよいか分からなかったので沈黙していた。しかし、年月というフィルターに掛けられてポイントだけが鮮明に記憶として残り、話しやすくなった。これは一九七五年、米国で当社が絡んだ花火PL裁判の顛末記である。わたし自身は非常にエンジョイした数週間の裁判であった。今になって思えばアメリカ人の大らかさ、悪く言えば自分の意見を通すためにはガムシヤラに進む押しの強さを改めて知った。

これは最終裁判に出席した半月間の出来事の記録である。

事件は、一九七三年にテキサス州南西部のメキシコ国境に近いリオグランデ地方で、独立祭の花火打揚げの最中に起きた。花火の玉が観衆を直撃し、破裂し、双子の幼児の一人を死亡させてしまった。打揚げ人は、主催市の消防職員であった。最初の裁判原告・被告は複数で、もちろん双子の親が市当局を訴え、市は米国内の花火会社を訴え、花火会社は花火の輸入買い入れ先のフランス、イタリア、イギリス、ドイツなどの花火会社を訴えた。更に市当局が当日の大会に保険をかけていた保険会社と保険会社を保証している保険会社が絡んできた。話がややこしくなったのは、まず市が保険を依頼していた地方の小さな保険会社が支払不能との理由で自己破産したことである。そこで保険保証会社は、自己破産をした会社を訴えた。更にPL法に基づき訴えられた輸出元のヨーロッパの花火会社が、損害賠償支払能力がないことが判明した。

一方、当時当社の米国への花火玉輸出は全体の六〇パーセント近くを占めていたと記憶している。未だ中国では、日本型球状玉の輸出はされていなかった時代である。そして日本国と、日本の企業は、金持ちであると言われる時代であった。裁判の関係者の中に頭の働く人が

いて、日本からの輸入玉が有ったのではないかとの話になり、大会に数パーセント日本玉が含まれていたことがわかった。もちろん、当社の玉も米国の大手の花火会社を通して売られていた。

裁判の後半で、裁判所から「召聘状」が届いた。当時、当社は米国東部の方でもPL裁判を行なっていた。このテキサス裁判がこんなに込みいったもので、しかも裁判関係者が賠償金の最後の出所を「日本の金持会社」に注目しているとは思ってもみなかった。先ず、裁判の公聴会（ヒアリング）がハワイで行なわれた。当時の貿易部長は飛行機に乗るのが大嫌いな人であったので、当時社長であった私の父親が出席した。ここから世にも不思議な裁判が始まるとは、誰一人考えていなかった。父は、英語が結構出来ると本人は思っていた。それはアメリカ人が会話の中で頻繁に使う「フフン」が言え、時には「サンキュー」が言えることであった。しかし、父は第二次世界大戦で陸軍造兵廠の監督工場を経営し、その間、陸軍上等衛生兵として外地にもいた経験があり、戦後はマツカサー司令部から最初にマツチ製造の許可を取得して儲けた自信が潜在的にあったと思う。そして戦後、外国に一人で花火を打揚げに行つたことも自信につながっていた。

その父に、ハワイでのヒアリング（相手側弁護士による証人尋問）に火薬や兵器の知識の乏しい通訳の方がついてしまった。その席で父の戦争中の工場での製品を訊かれ、照明弾を帝陸軍のために製造していたと言った。通訳は、弾を「ブルエット」と訳し、父も通訳人も事の重大さに気づかなかつた。日本では照明弾とは上空に発射する照明筒の意味である。ところが、いつのまにか、「弾」だけが一人歩きをして殺傷用弾にすりかわっていた。

それから数か月して、テキサス・リオグランデでの最終裁判が始まることになった。永田町にある国際法律事

務所、ニューヨーク・テキサスにある各法律事務所との調整が始まった。いつのまにか米国裁判行きは、飛行機嫌いの貿易部長と自称英語通の父との間で、私を行かせるといふ話になっていった。一方英語の苦手な私は、米国の大学の学士入學で数学・化学の理系ダブル・メージャーで辛うじて助手奨学金を貰って卒業し、米国の機械メーカーで働いていただけの経験であった。英語が得意であればロー・スクールにでも入っていただろう。

そんな私は、三省堂のコンサイス英和辞典をしつかりと握ってテキサスの地に降り立った。裁判所はヒューストンから車で何時間もかかる田舎町にあった。ところが裁判所を見て驚いた。この裁判所は小さな町に似合わないほど立派な石造りであった。未だ建築後数年とのことで、その建築理由を弁護士さんから聞いて再び驚いた。判決に不服な市民が木造の裁判所を燃やしてしまったので絶対に火事に強い建物にしたとのことであった。市民にはメキシコ系の人が多く、非常に熱血漢が多いとのことであった。ホテルの「公用語」はスペイン語であった。裁判中にトイレに行くときは何時も警官がガードしてくれた意味があとでわかった。日本人は年に一人通過するぐらいの町であった。

まず、裁判は十のグループがかかわっていた。私たちは、裁判中酒を断っている若い主弁護士先生と酒の好きな老弁護士先生の二人と私であった(図1)。全体では相当の人数になった。陪審員選びから始まった。第二次大戦中に日本軍に親族を殺された人を相手側は選ぶとうし、我がグループは、日本びいきのインテリ層を選ぶとうと攻防が始まった。

それは、相手側の主張が、当社は戦争中多くの米国人を「弾」で殺傷し、戦後はそれが出来なくなつたので、花火玉を米国に大量に輸出してアメリカ市民を殺害しているとの論法を進めるためであった。

裁判の初日にスピーチを数分間させられた。陪審員が

ら完全に無視された。英語下手がしゃべると英語が不得意のメキシコ系の人たちという理由だけではなかつたと思ふ。父が発見に際し、どんなことが起こつても日本に帰つてこいよという言葉がズシリと思ひ出された。

裁判は朝の八時過ぎから夕方五時ごろまでの、土日を除く毎日であった。裁判の間中、朝から夕方までコンサイス辞典を開き放しであった。法律用語は本当に分からなかつた。

主な争点は、双子の幼い姉妹の一人が亡くなつて、他の一人が正常に成長できるか？日本の敗戦後の花火玉による攻撃陰謀は？上空に発射したものが観覧席に飛翔する物理的要因は？等々であった。最初の争点は、心理学者や幼児教育専門家などが意見を述べていた。二番目の問題については、照明弾の翻訳ミスに気づいた。三番目の問題も、アメリカのメーカーのカタログに斜め発射が記載されていた。二番目と三番目の解は、裁判中に私が探し出した。

審議も最終段階になり、被告側の私も最後の陳述の機会が与えられた。今度は三十分間位弁明の時間をもらつた。わたしの経歴、教育、家族構成、宗教などを陪審員に向かつて話をさせられた。今回は、陪審員全員が私の話に耳を傾けていることが感じ取れた。もつとも、裁判の一週間位経過した頃から、原告の幼児を亡くした若いお母さんを含めて、休憩時間などに私に話しかけてくるようになつていった。どうしても理解できなかった。

この裁判所地帯がバイブルベルトと呼ばれる宗教色の強い地域帯に属していることは知る由もなかつた。朝から一日中、コンサイス辞典を開いては読み、閉じては考え込んでいる私を、朝から聖書を読んで瞑想していると、陪審員の方々が思い違いをしても不思議ではなかつたと思ふ。しかも、私はカトリック教徒で、当時洗礼を受けたばかりであった。勝負はついてしまった。私の立場は、鼻持ちならない金持ち日本人から戦後の経済復興

に汗を流しているマイナー民族に変わっていた。陪審員のほとんどが同じマイナー民族で同宗の人たちであった。花火を客席に向かつて斜めに発射しない限りは、この惨事は起こらなかったことも納得してくれた。

採決が出た直後に新聞記者がきて、花火を打揚げていた市職員全員が独立祭のお祝いでへべれけに酔っていたことを教えてくれた。

裁判からの帰途、テキサスの田舎で食べたステーキの厚さと無罪放免の嬉しさとが、今でも昨日のことにように思い出に残っている。

もつとも、それから数か月後に米国東部で行なわれたPL裁判でも、テキサスの弁護士先生からニューヨークの法律事務所にも強い推薦があり、再び出向く羽目になってしまった。

今後も危険なものを扱うので安全第一を配慮して経営に臨んでいきたいと考えている。そうしないと神様は二度と支援の手を差し伸べてくれないだろうと信じている(図2)。



図2 勝利を祝って天に乾杯



図1 わが弁護士先生達